

II. 詩とスケッチによる板東俘虜収容所の日々

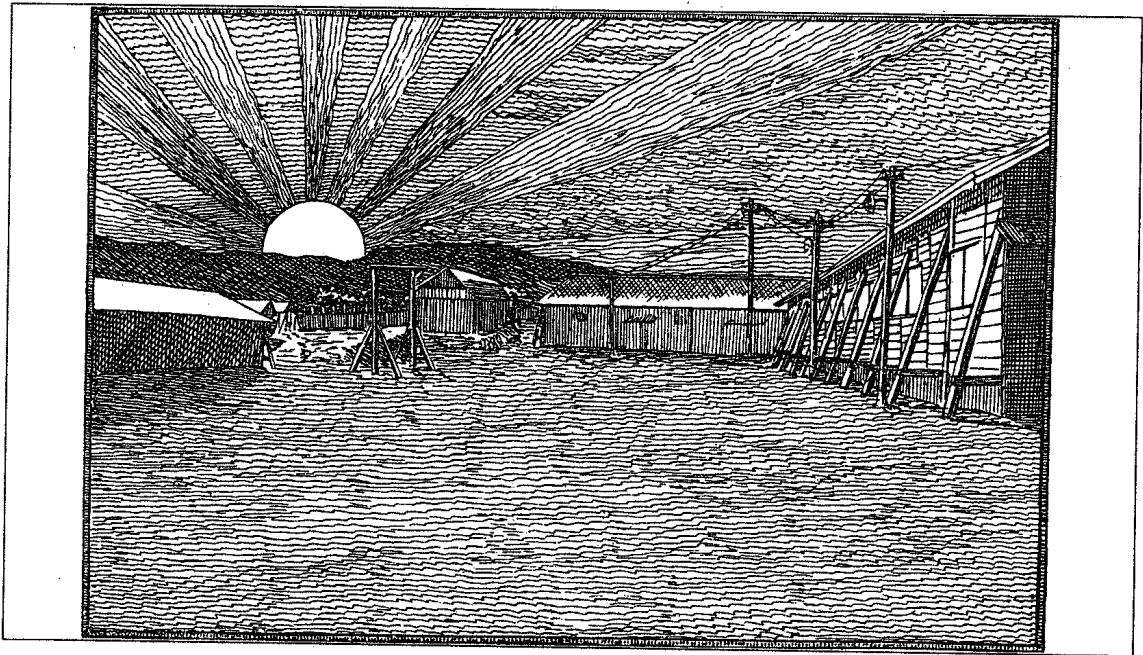


§ 1

君がここで何をして、何を考えて、どんなふうに泣いて、笑って
4年余りの間に、君がどんなふうに悩んで、喜んだか
つまり鉄条網の後ろで、戦友よ、君がどんな生活をしたか
それを詩と絵とで、このスケッチ集が描き出す。
もし柵が倒れたら、これを外の世界へ持って行ってくれ。
君が自由で好きなことのできる時に、君の仲間に見せてやってくれ。
楽しく笑い、気兼ね無く腹も立ててくれ、この先の人生の階段で。

§ 2

朝風が涼しい手で撫でて、まどろみ夢見る大地の目を覚ます。
雄鶏の叫びと鳥のさえずりが、新しい一日の最初の挨拶をする。
無限の宇宙から、燃え立つアサヒの火の玉が上る。
アサヒ、それはふるえ、あふれ、光り
そして空を赤金色に彩る。



§ 3

朝一番の蠅が君の鼻の周りをブンブン飛び回る。

君が歩哨に起こされるずっと前。

君は蚕棚で寝ている・・・ある所は伸ばして、ある所は曲げて。

まだ朦朧としている君の耳に押し入って来るのは、早朝の最初のざわめき。

「馬や小路」で君の従卒が犬に話しかける。

君の靴にグリースを塗って磨いてる。

すると突然、静かさと安らぎが破られる。二人の早起き男だ。

ペチャクチャおしゃべり、笑い声が聞こえる。

洗面器のガランガランのおまけ付き。

君は毒づき、あくびをし、起き上がり、服の中にすべりこむ。

よろめく足取りで、覚えのある場所に急ぐ。

そう、君はわかってるな、俺がどこのことを言ってるか。

そこでびっくり、見つけ、同時に嗅ぎつける。

汲み取り隊だ。君は座りたい。

嫌なやつのでいで、そして硫化水素の雲のでいで、君のご機嫌は最悪だ。

その雲は君を捕らえ窒息させる。胃袋がでんぐり返る。

君はそいつらに一言いってやりたい。

ところがその黄色い男は、君の罵りをニヤリと笑って聞くばかり。

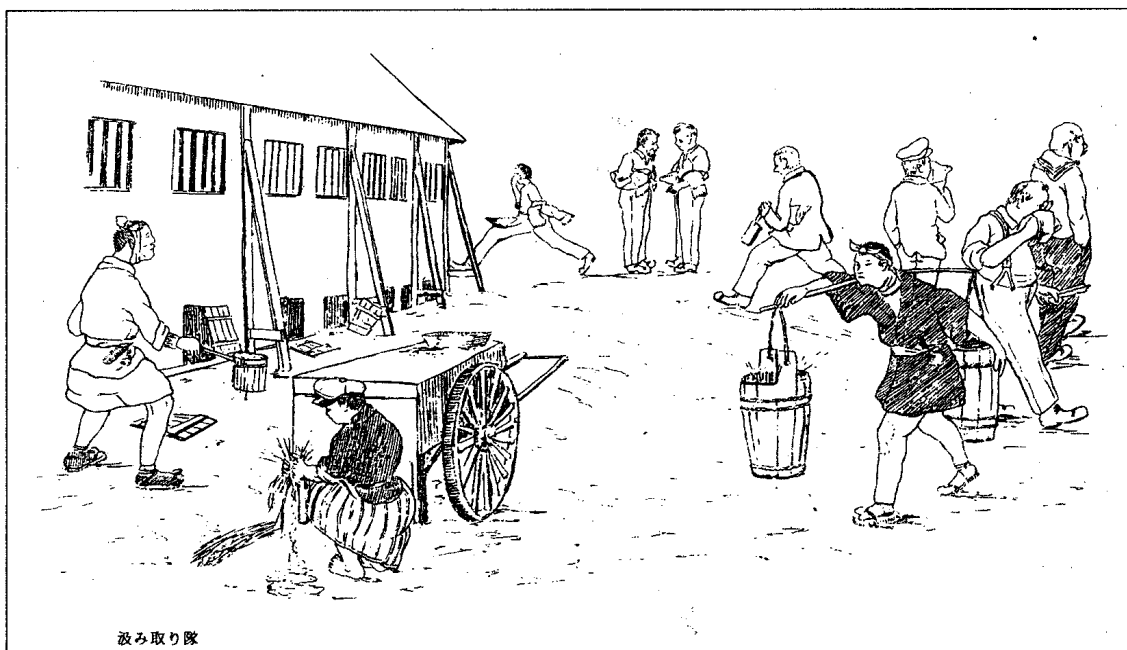
君が足をふるわせて騒いでいるうちに、汲み取り屋は笑いながら、

君に挨拶する：「オハヨー、ドイツ！イカガデスカ？」

これでもう我慢の限界だ、君は叫ぶ：「サヨナラ！」

そしてフリアの鞭で打たれたみたいで速さで、

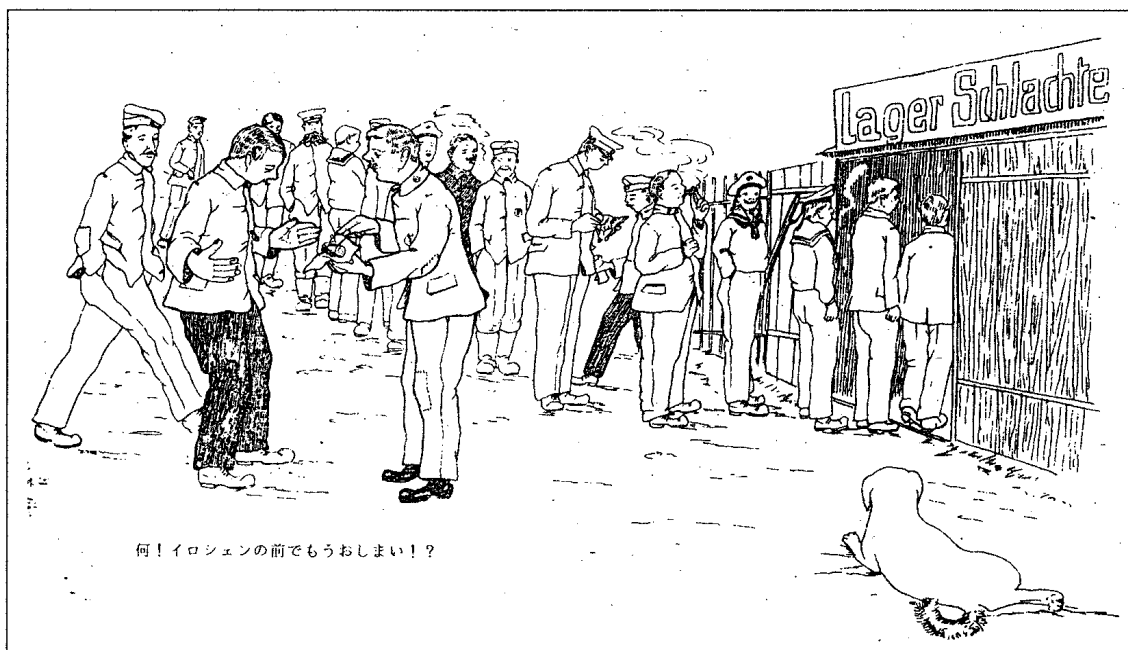
君は汲み取りびしゃくの帝国から逃げ出す。



波み取り隊

§ 4

当たり前なことだが家畜というやつは、
たいてい屠殺されるためにこの地上に生きている。
で、去勢牛や羊や雌豚や馬が、埋葬されることはあまりない。
というのも、おおかたは一短いのちの後で—
人間がそいつらをみんな食ってしまうから。
人間こそ最強の肉食獣、ここでも刃物を鋭く研いで、雌豚を刺し殺す。
まあ、初めは鳴き叫ぶが、次の日にはゼリー寄せになる。
牛なら鼻に一撃くれてやる。結果は「レバーケーゼ」。
牛肉と豚肉を混ぜて、腸に詰め、それをまずブラシで清めてから、
いろんなソーセージをこしらえる。例えば”茹でソーセージ”。
個人的なことを言わせてもらおうと俺はこれが好みだ。
それから”ブラウンシュヴァイク風”もある。
塩、胡椒入り、こいつを食べると喉が乾く。
そして血のソーセージ、これを忘れてはいけない。よく食べたものさ。
それから”レバーソーセージ”もうまい。たとえ種豚でなくても。
ソーセージだけが俺達に、捕虜生活での力と精力をつけてくれる。
この連中を見ても、一人のこらずそこに立ってる。
そうとも、何時間もそうやって、俺達戦争捕虜と犬どもは、
この小さなソーセージ工場の前で。
それでも俺達はでぶにはならない。
一緒に食らったサナダムシが、殆ど全部食っちゃうから。



何！イロシエンの前でもうおしまい！？

§ 5

教えてくれ、君はこのスケッチの中にいるだろう？

注意深く指先を使っている、左側の男は君じゃないか？

歯を磨いてるのは、君じゃないか？

それとも両肌脱ぎの大張りきりで、顔を洗おうとしている男が君か？

俺が言ってるのは、タオルをつかんでるやつのことだ。

ひょっとしたら、ちょうど石鹸を塗ったのが君か？

顔を冷やしているのが君か？

もしかしたら、うがいをして口をゆすいでいる男かもしれない？

右側のめいっぱいかかんでいる男が、君なんだろうか？

それともちょうど首筋を、ごしごし拭いているのが君か？

まあ、とにかく君はそこにいる。

しょっちゅうここで身づくろいをした訳だ。

冬は氷のような風に痛めつけられ、

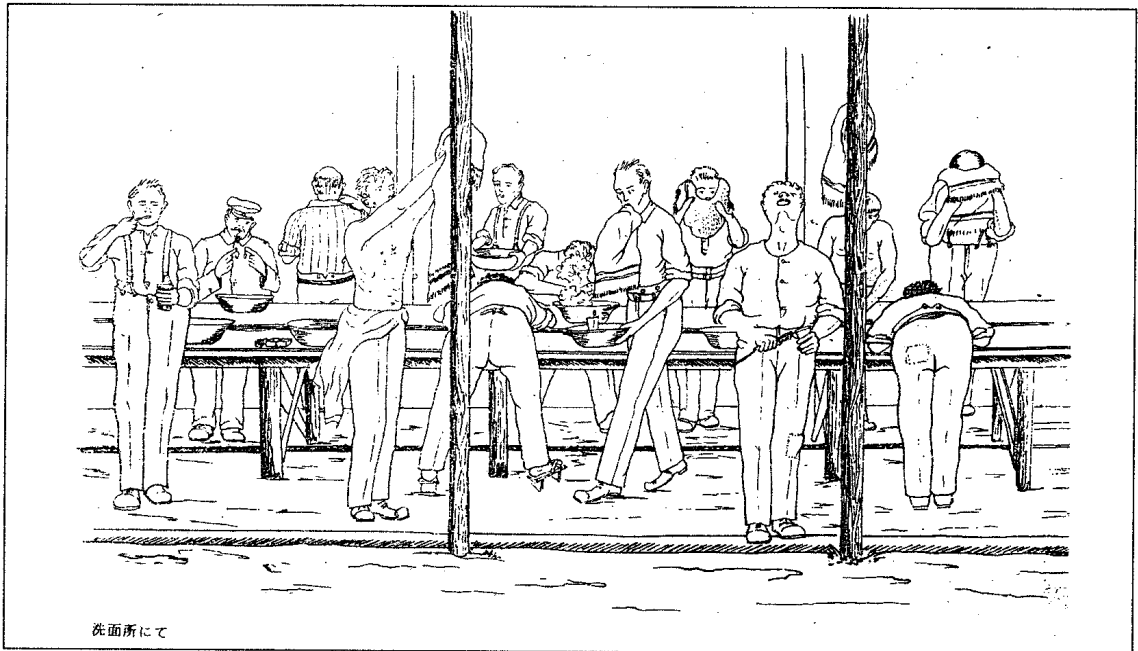
夏、やっどこさ顔が洗えるくらいしか水がないときも、

長靴とゲートルを履いてここに立っていた。大男だろうと小男だろうと。

だが俺はこれで止めておく、筆を置く。

ページをめくれ、めくれ！君のために言うが、頭を下げろ！

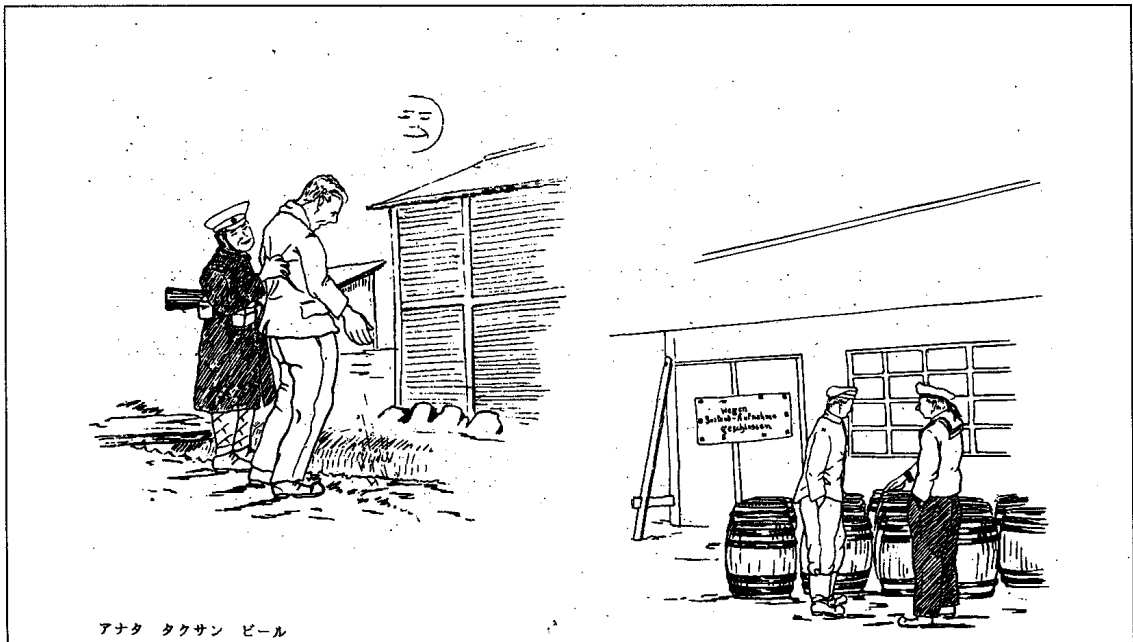
右側のうがいをしてるやつ、気をつけろ！—あいつがすぐに騒ぎ出す！



洗面所にて

§ 6

俺達はやっつけるための拳をもっているのに、
この国に来てから、兵士らは道具も武器もなく、無為の地獄に追放だ。
らい病やみか奴隷も同様、世間から隔てられ、
退屈な食っちゃ寝で、俺達の金を飲み尽くす。
それで俺達、何年も、体も精神も弛んじまって生きている。
俺達、フン族か野蛮人と同じ！で、作男と一緒に罰を受けてる。
お勉強だの努力だのには飽き飽きで、
俺達、知ってることは一つきり、憎しみだ！
存在の吐き気にとっつかまって、俺達の慰めはもうグラスだけ。
誰かが俺達に、多くの素晴らしい時のことで嘘をつくなら、
俺達は多くの苦しい時のことで、運命を騙す。
捕虜ってのは沈没してる。俺達がグラスを前に座ってる限り。
俺達が飲み過ぎれば、それで悪魔と拘わり合いってもんだ！



アナタ タクサン ビール

§ 7

君は90 cmの「部屋」の上に座ってる。簿記と数学と語学をやってる。

すると突然、哀れっぽい泣き声が聞こえてくる。

情けないヴァイオリンの悲しげな啜り泣きだ。お隣さんが「練習中」だ。

君は乗数の計算中。左隣ではスカートに熱中だ。

「パウルの野郎、運のいいことに何を持ってやがる！また1と4だ！」

これで勉強中の君はちっとばかり頭が変になる。

ヴァイオリンがむせび泣く：『あなたは私をちっとも愛してくれない！』

「何だった？スペードの2か？じゃ、誰が出す？」

君の頭は空っぽになる。—『おお、私をつかまえてちょうだい！』

「何だ、ヴィルヘルム?! 18でもうパスするのか。？」

君は $15 - X^2$ の計算をしている・・・ヴァイオリンがさらに啜り泣く。

『ハロー、子猫ちゃん！今じゃ君たちじゃ仕立て屋さん！』

「おお、神様！こんな日がまだどれくらい続くんだ!？」

「いいや、マックス、何をしたいか言ってみろ、おまえ慎重過ぎるぜ！」

これで君は吃りながらガックリ膝を折る。

ヴァイオリンがかすかに啜り泣く：『アンネマリー』・・・

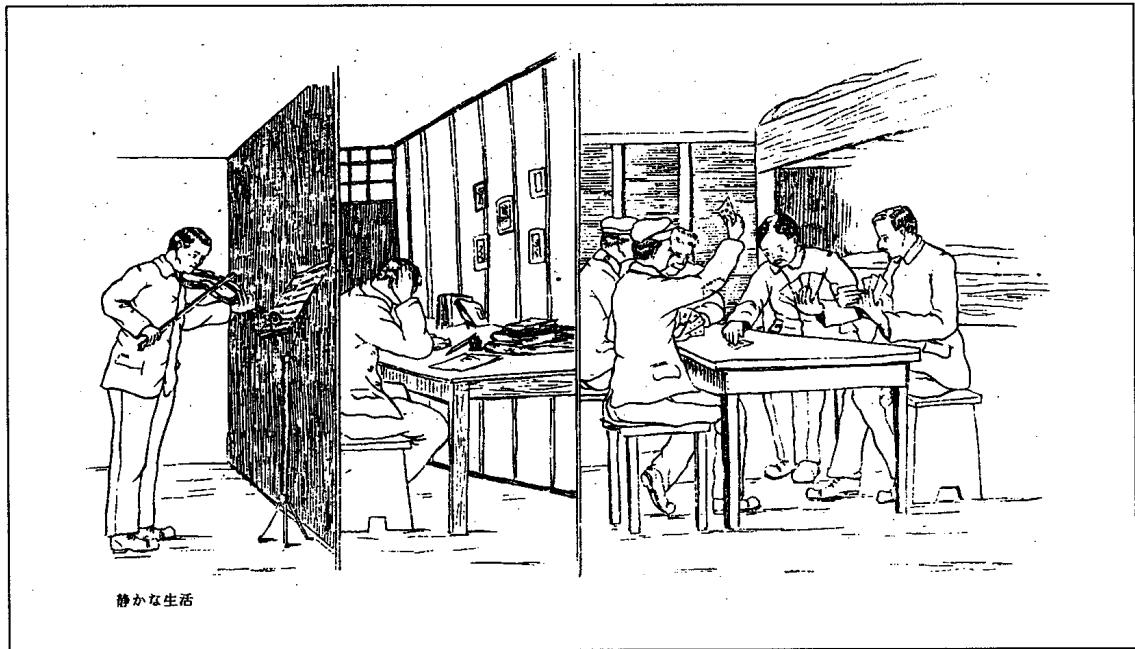
君の顔は苦悩に歪み、憎しみがたぎる。

「いいや、パウル、クィーンをもってきてどうしようってんだ？

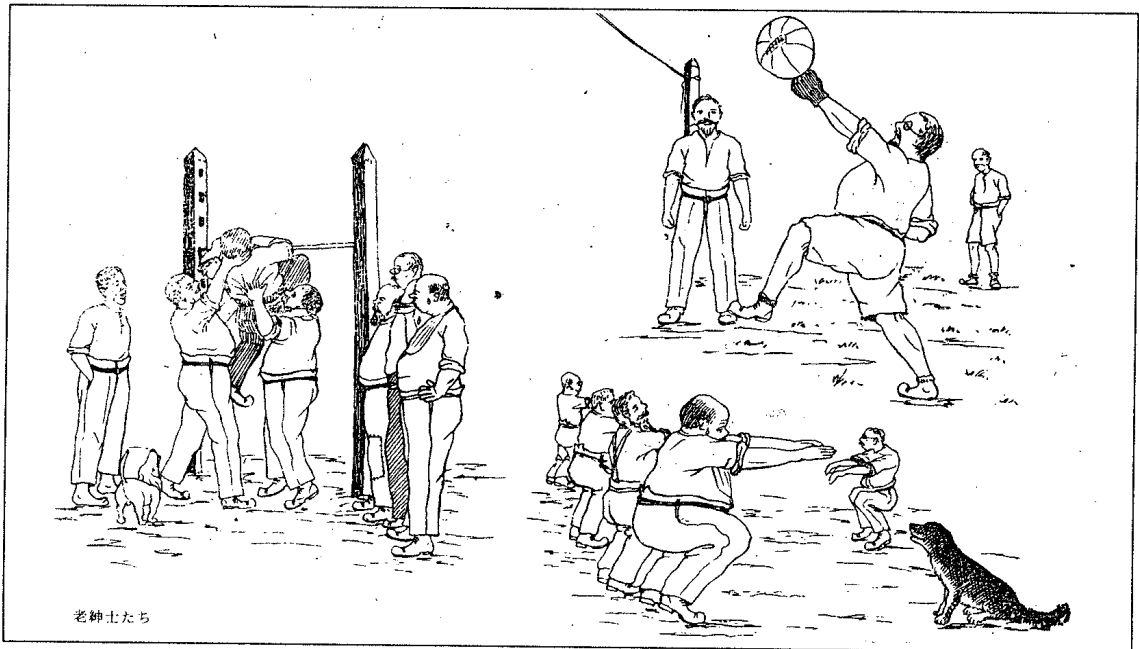
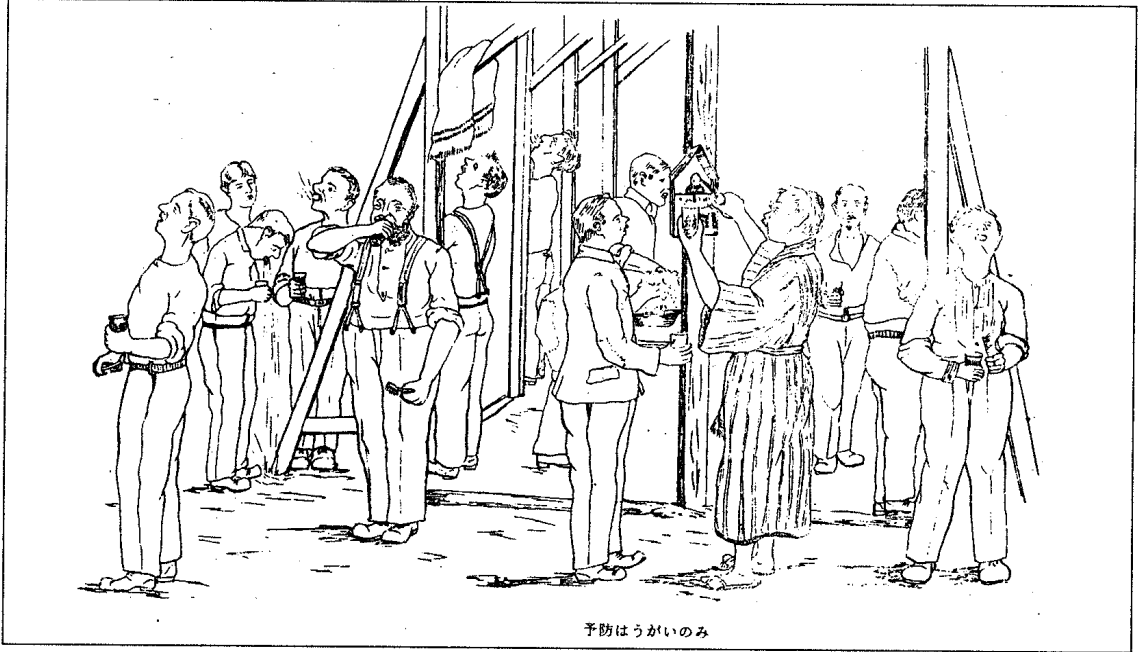
エースで勝負しろ！」

ヴァイオリンがあざ笑う：『待つがいい、汝もまた間もなく安らがん』

君は怒って跳び上がり、本をボタンと閉じる。



静かな生活



§ 8

どうだ、君はこの三人を知ってるか？

ヤーコプ、ウマソー、そしてタマゴタマゴ。

朝早く—君はまだ高いベッドの上だ—彼らは籠と板を持ってやって来る。

誘いの歌を歌いながら、バラック沿いに行進だ。

もう遠くからその声が聞こえる。恵まれた声のこの紳士たち。

そらヤーコプが“小パン”を持ってやって来る。

そして俺達をコーヒーを飲まずにいられなくする。

それからとろけそうなタマゴタマゴの呼び声で、

シュラーが通って行く：「卵3個？承知で、旦那、どおぞ、毎度あり！」

そして最後に聞こえてくる：「来ましたよ！—タクサンありますよ！」

ウマソーがきたんだ。彼の板からは、プレーツェルが輝いて見える。

ポリポリして油っけがたっぷり。

チーズケーキはできたてで柔らかい。おまけに最高のパイ。

おまえは決して俺達を誘惑しようとしている訳ではない！

君を誘うのはバターケーキだ。

鼻の先であだっぽく“バレーカット”が踊るのさ。

そして“ジャムドーナツ”が真ん中で、

“ミカドカット”の間に鎮座する。

アア、君の目がどんなに潤んで、

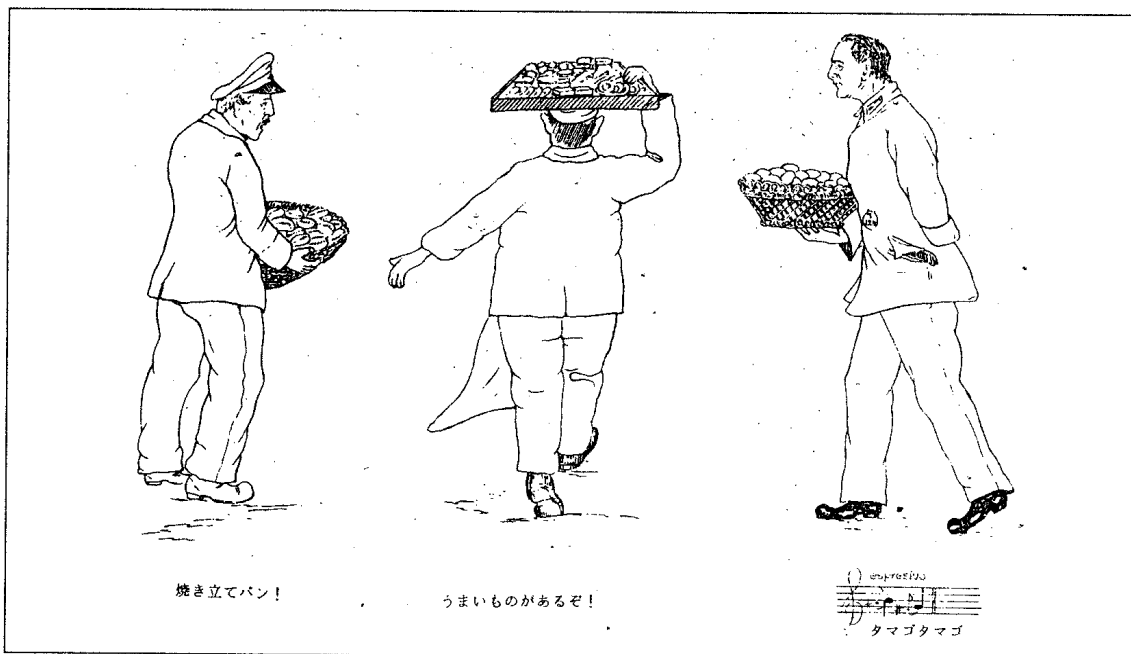
“ビーネンシュティッヒ”に向けられていることか。

そいつはすごく食欲をそそる香りを放ち、腹にもこたえるよ。

そうさ、ヤツらが俺達の財布を空にする。甘い物を食べさせようと誘う。

呼び声と歌で、何週間も何か月も、何年も。

この声に恵まれた三人、ヤーコプ、ウマソー、タマゴタマゴが。



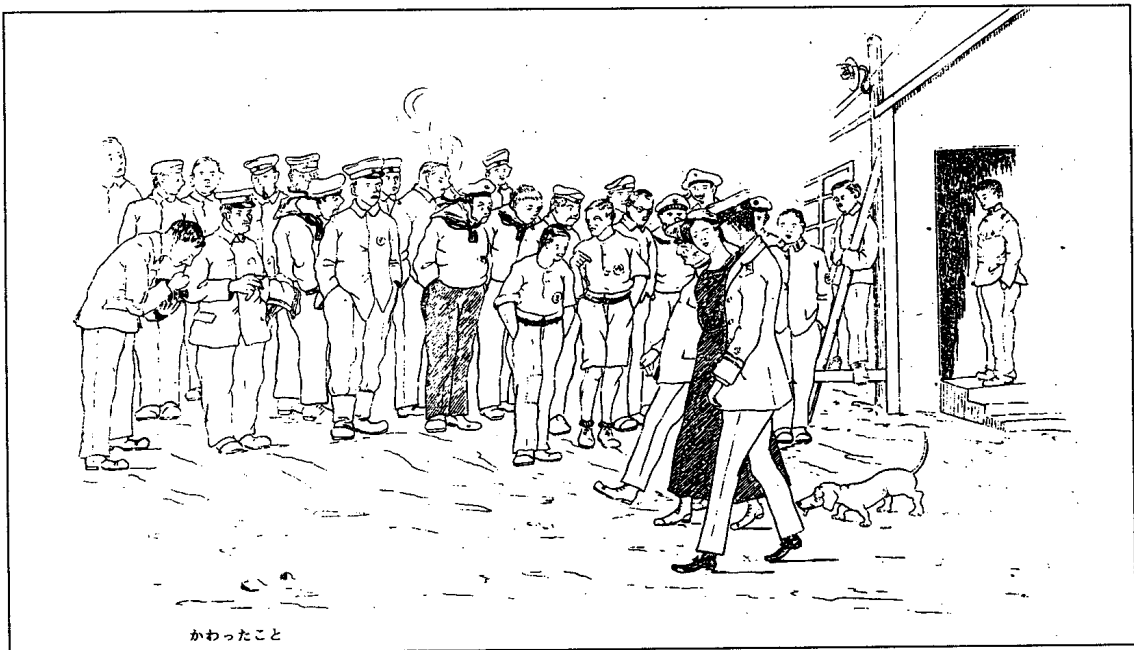
焼き立てパン!

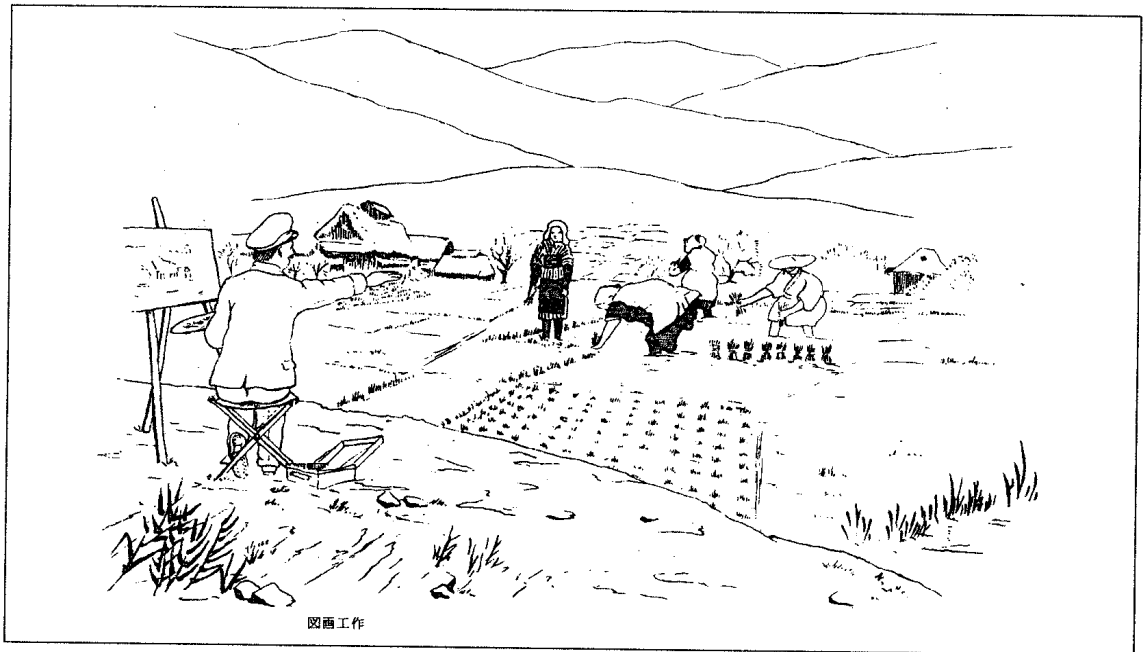
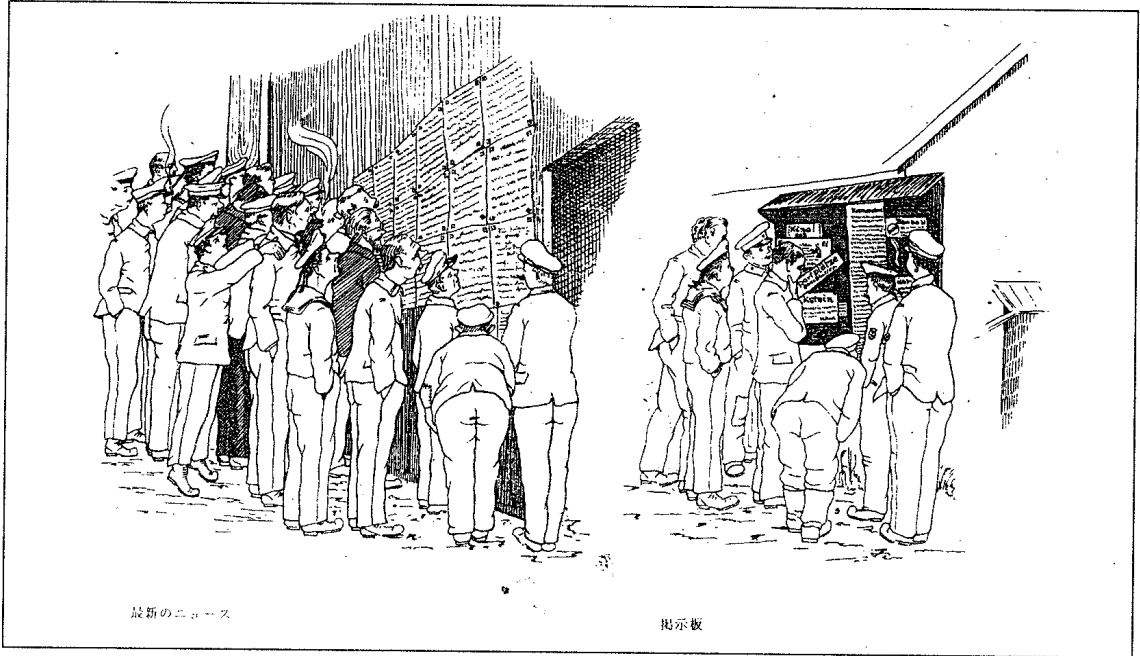
うまいものがあるぞ!

♪ Tamago Tamago
タマゴタマゴ

§ 9

俺達がよく聞くことだが、その眼差しと笑いとの、
とても柔らかで優しい手で、俺達の在り様を明るく、
穏やかにしてくれるものがあるという：女達だ。
それが俺達の居る所に入って来ると、
君は不意打ちに驚いて、ものも言えずに立ちすくむ。
女の目の一青の一茶色の、ほほ笑みの反射が、
明るく君の顔をかすめて、君を身震いさせる歓びが起こる。
君は見つめ、驚き、それが信じられない。
君がまだひどくすねていて、君の在り様は荒々しくて、
果てしなく長いこの時には、言葉も粗野だったが、
君は嬉しくなって、微かに、はにかんだほほ笑みを浮かべる：
そうさ、俺達の女達だ。





§ 10

ハインの誕生日だ。戦友達を、今日、彼が招待した。

ちょっとしたコーヒー・パーティーに。

時間ぴったりにみんなやって来た。

どんなことになったか、—1時30分—コーヒーはうまい。

みんなほんとに熱心に飲んだ。3時にポットが空になった。

食べ物もうけっこう。みんな満足、腹いっぱい。

今はもうゴールデンバットに手を伸ばすとき。

みんなあんまりものを考えない。おっとそろそろ4時になる。

ユップが言った：「ようハイン、ビールはどこにある？」

コーヒーは、うん、とってもけっこうだった。

でもね、わかるだろ、俺はゴールデンバットを

どっちかという一杯やりながら吸いたいね。」

ハインは渋い顔をして、考えた：

「けっこうなものいりだ、こりゃこたえるわい」

でもハインは大声で言った：「そうだな、おい16リットル持って来い」

16リットルが出て来た。みんなが樽の口を開け、

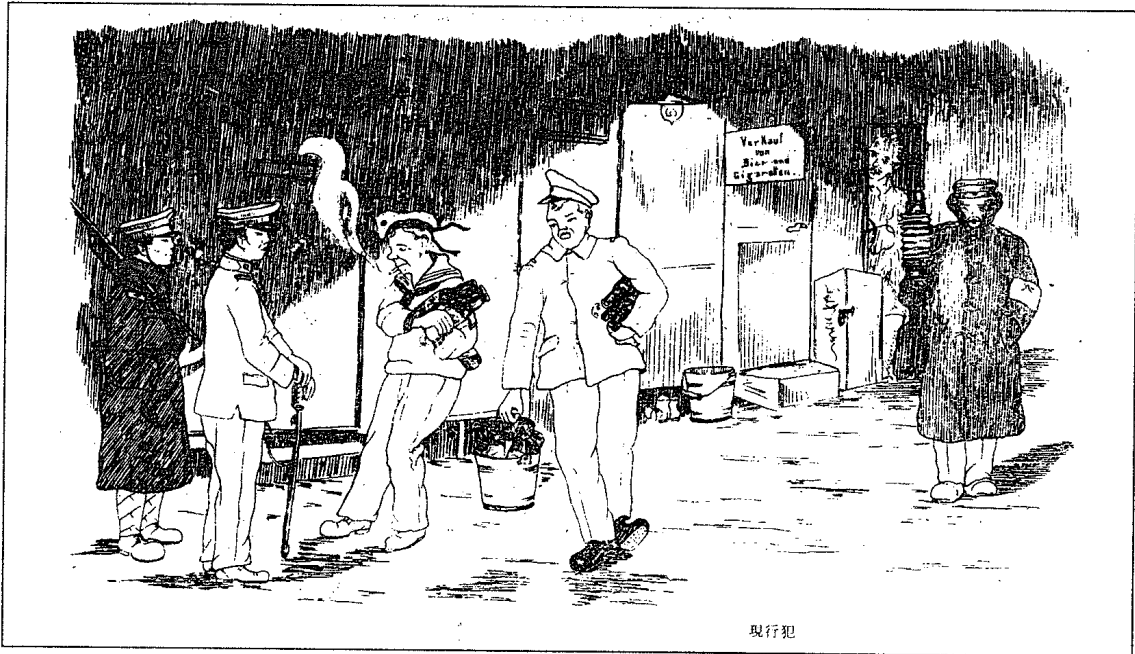
だんだん昔話をし始める。

みんな「あのころ」のことを、そして「家のこと」を話す。

そしてグラスのあたりに思い出が浮かび上がる。

「ハイン、俺はもう空っぽだと思っぜ、とても明るい音がするよ！」

その時、6時のラッパが鳴った。今度はみんな点呼に行く。



§ 11

点呼の後でみんなまた集まった。

2つ目の樽の所に。そして故郷の歌を歌って、
飲んで、煙をはいた。それが7時半だ。

マックスが叫んだ：「ヘリィェー，どこにビールが残ってる！」

3つ目の樽はとくにうまかった。

『かまわないから』を歌い，今度は『朗らかに！』と
『アンネマリー』を歌う。時計の針は9時を指してる。

ローザは予備役兵に10杯目を注いだ。

樽はまた空になった。みんな財布の底をはたいちまった。

そして10時からもう瓶のビールを飲むしかない。

時計の針はもっと進む。もうとくに11時過ぎだ。

「なあ，ハイン，いったいどうなってるんだ。

誰が次の1ダースを取りにいくんだ？」

「マックス，おまえの番だ！」で，マックスが行った。

こいつはちょっとしたヤツだ。

マックスがバケツを持って来た，ドアの前にあった奴だ。

そいつは傾いていたから，ひどく濡れていたよ。

おまけにヴィレムを連れて来た。こいつは防火歩哨に立っていたんだ。

みんなでビールを取りに行き，そろそろおひらきにしようと思った所だ。

ところが道に二人の紳士が立ってるのが見えたんだ。

「俺はもうちょっとで，歩哨士官だと思ったぜ」

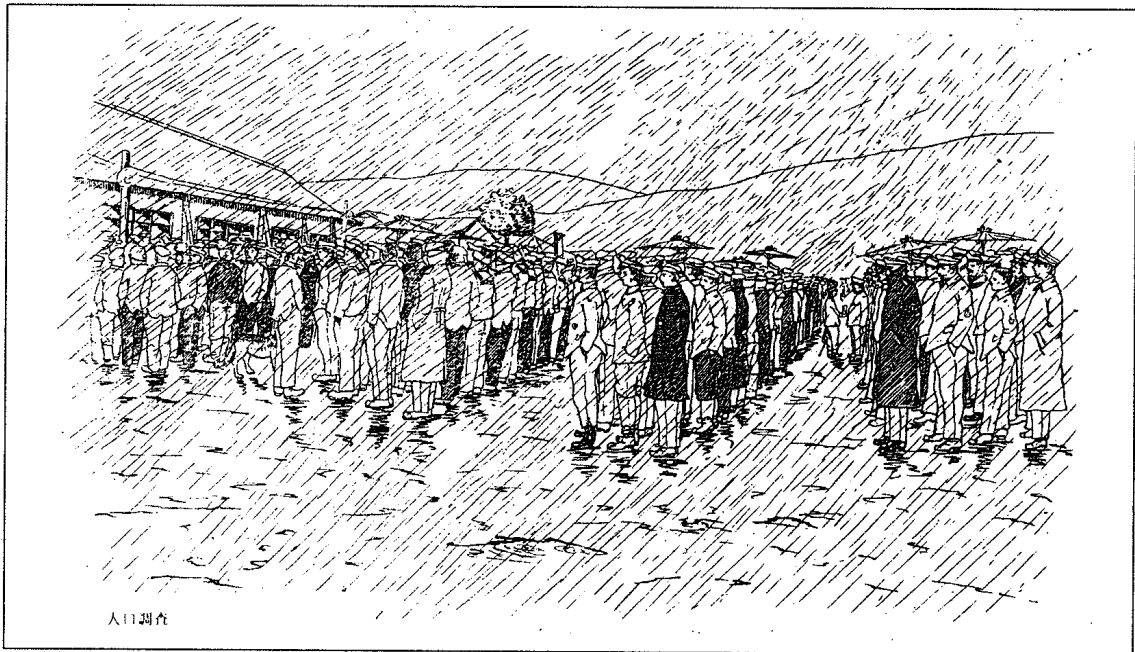
マックスは考えた。「またか畜生，くだらんこった！」

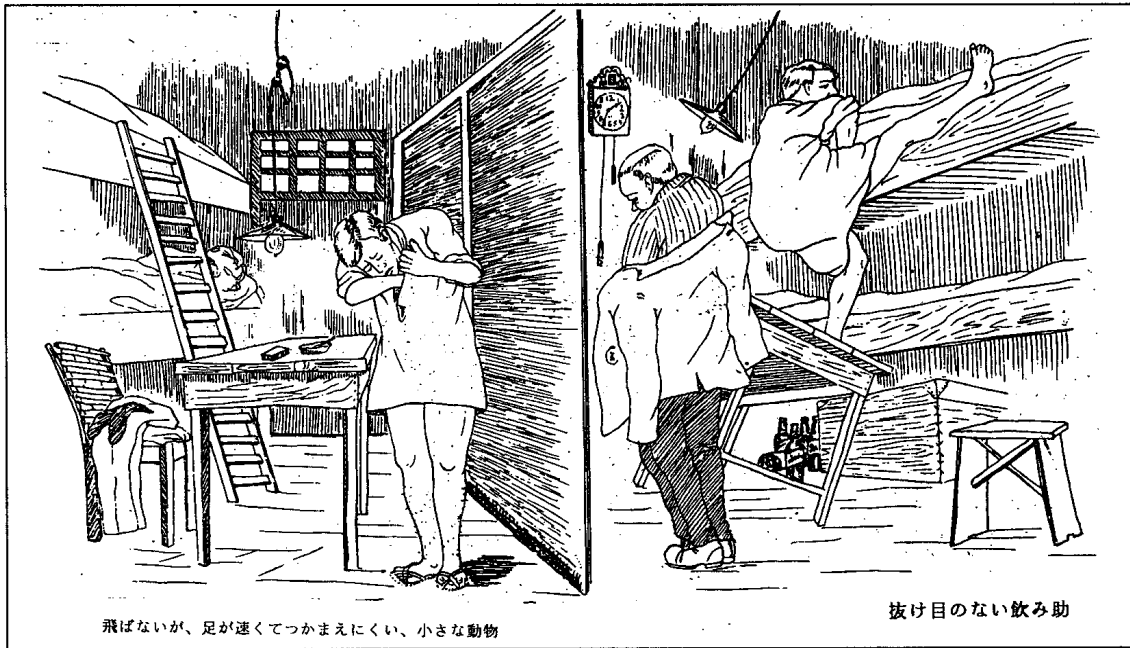
ヴィレムにはもう考えられない，ヤツはしゃっくりして喘ぐだけ。

ピーゼルが心配そうにささやく：「そら捕まった。」

三人の「でぶ」だってことはわかってた。「三人のでぶ」，神様！

それでもハインには，けっこうなコーヒーパーティーだったさ。





§ 12

何にでも終わりというものがある，神の続べます美しの世には。

そしてここでも，俺達の最後の日が数えられた。

地上には永遠に続くことなぞ何も無い。歓びも，苦しみも。

そして一度「起こる」ことになっていたすべてのことに，

「最終回」がやって来る！

そうさ，もうじき最後に，歩哨が合図を吹き鳴らす。

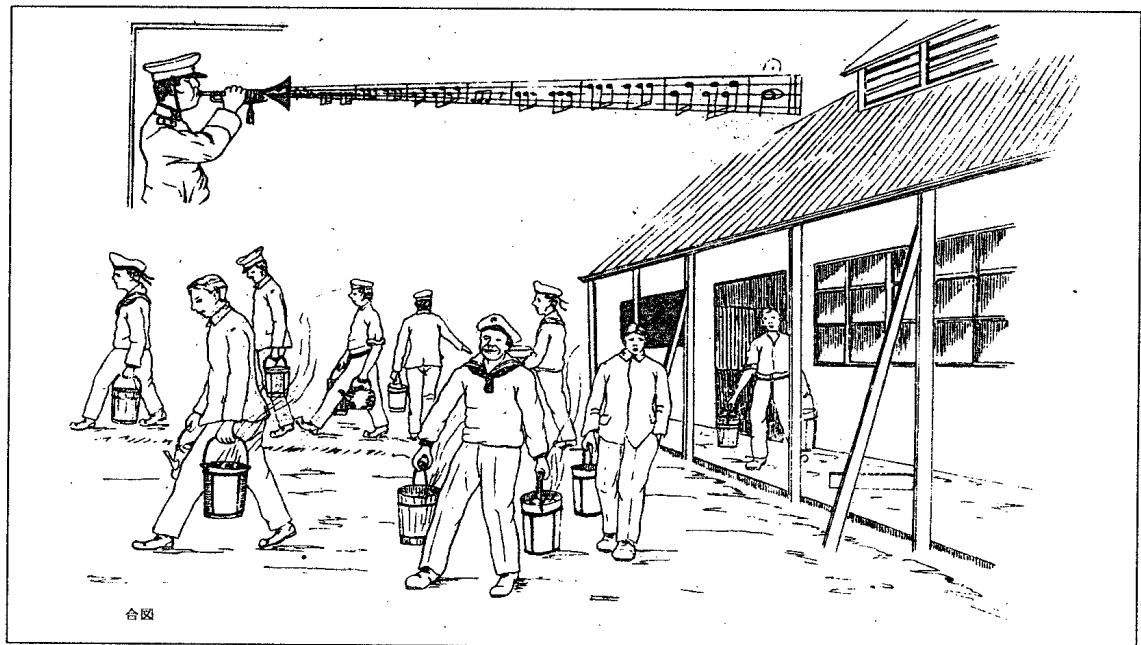
そしてこの最後の日に，俺達は最後の「一皿」を取りに行き，

最後のソーセージを取りに行き，最後の渴きをいやすんだ。

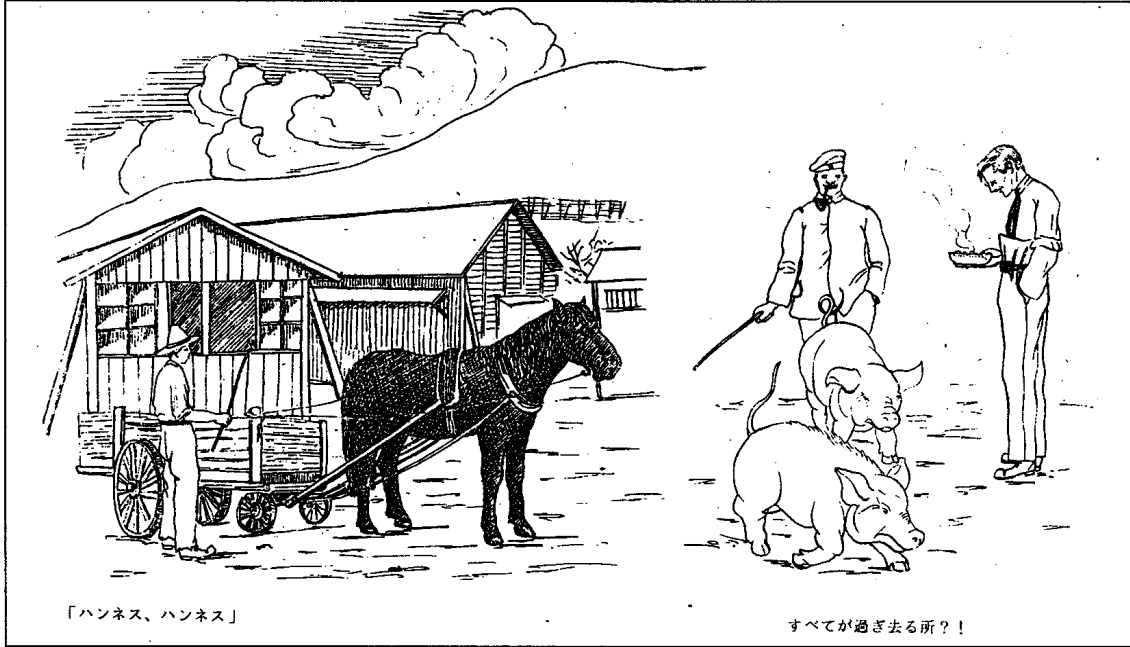
もちろんさ，戦友，俺は鉄条網の後ろでのことを言ってるのさ。

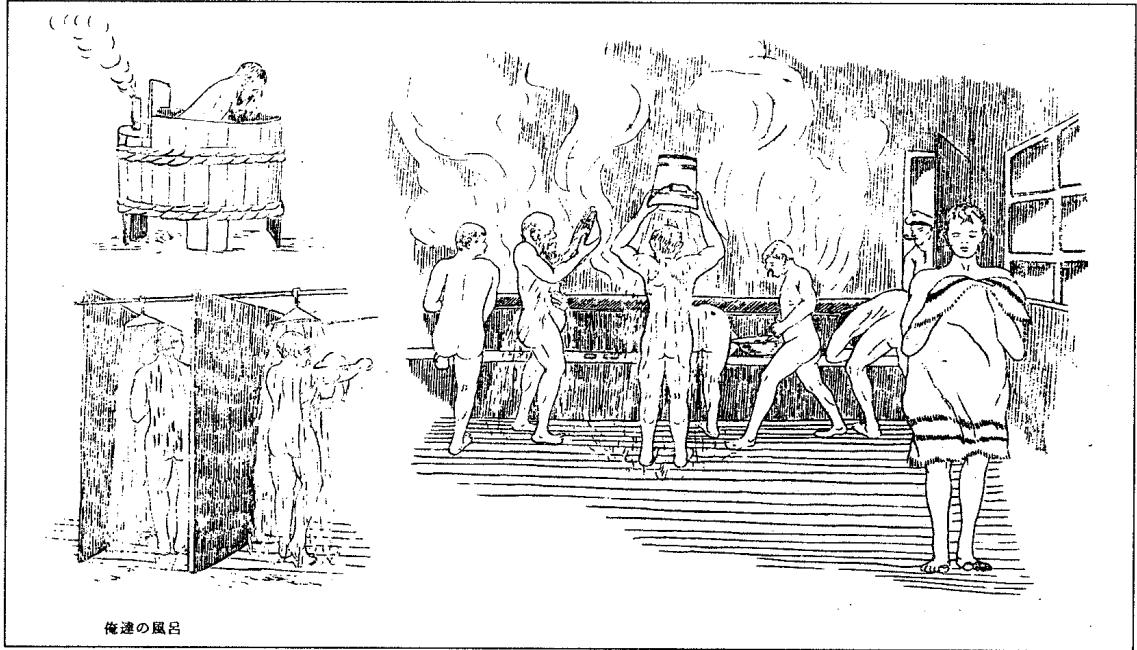
だって渴きってのは決して俺達を開放してはくれないのだから。

それどころか，そいつはなおさらひどくなっていくだけさ。

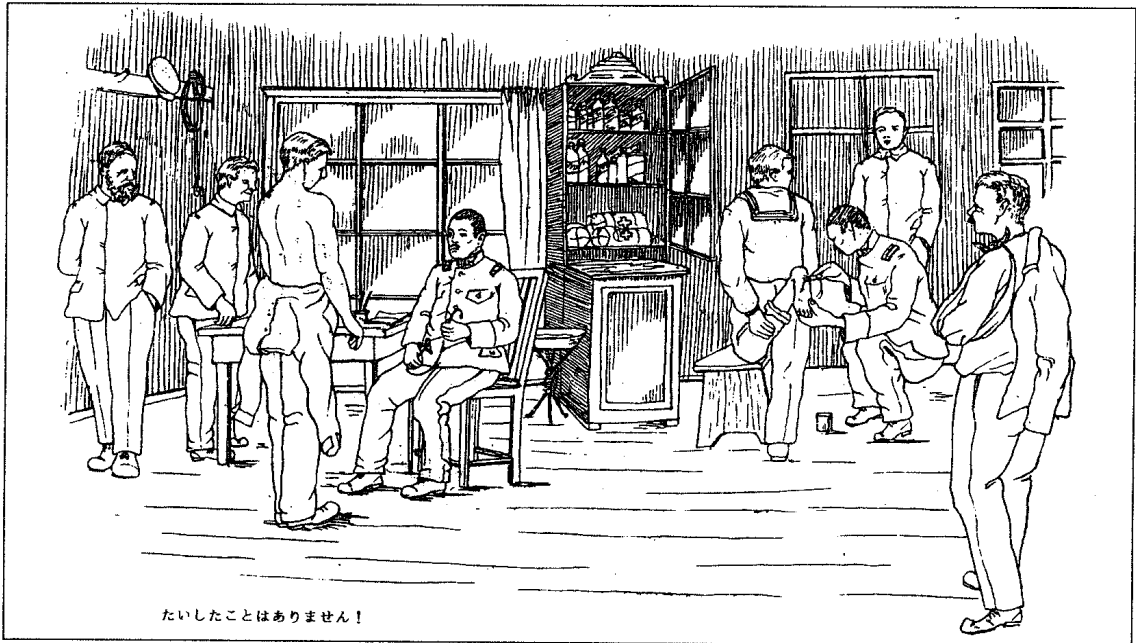


合図

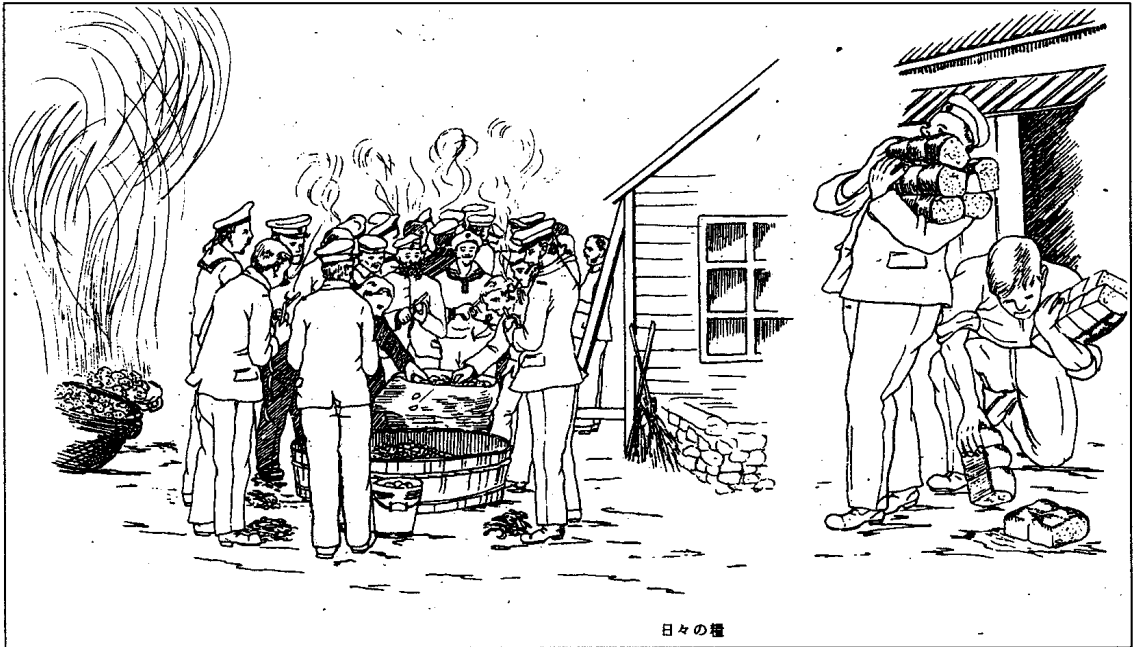




俺達の風呂



たいしたことはありません!



日々の糧

§ 13

そうさ、最後の最後に、俺達は殺風景な所へお参りに行く。

そこで「衛生的に」イヴァンが俺達に最後のグラスを運んで来る。

それから最後に俺達は、下の九柱戯場に行く。

そこではヴァストル・レッターマイヤーが、
最後の目玉焼きを運んで来る。

そこで俺達は最後の樽を空にする。

ニーダーレーナーがそれを転がして来るんだ。

そうさ、最後の最後のビールを、俺達はプフルーガーの所で飲む。

最後に俺達の胃袋をいっぱいにする。

おかしな「馬車」の中で、最後の最後のフライパンの中身で。

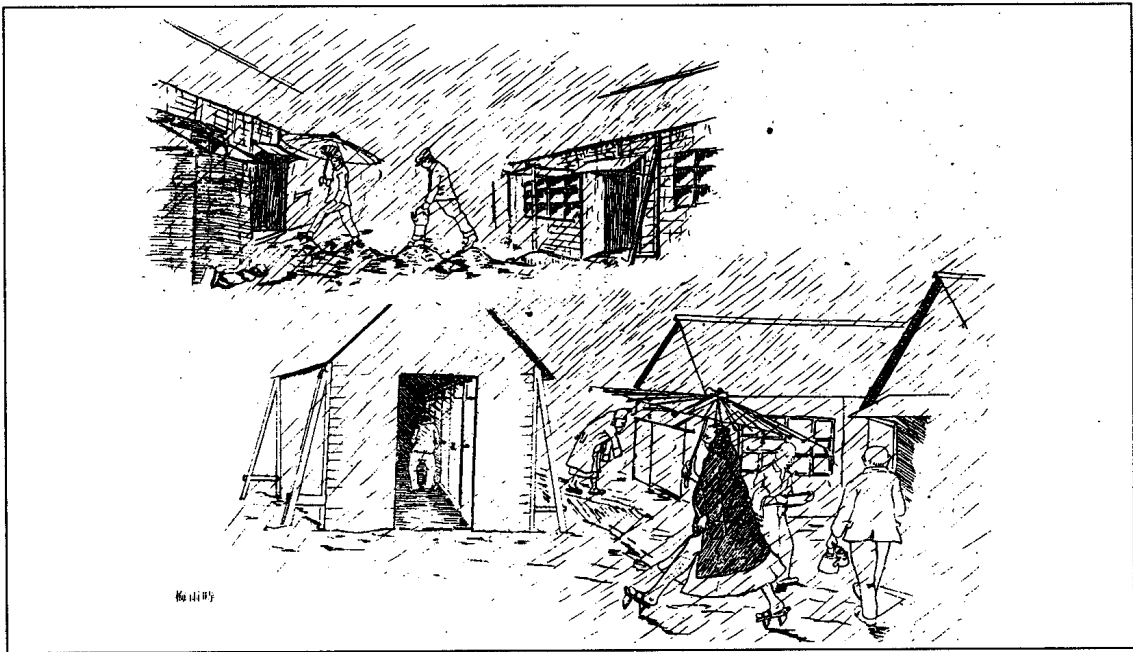
そうさ、最後の最後のジョッキを、俺達は最後の時に空にする。

最後のひとまわり、賽ころを投げる。

「休憩所」、酒保で、泡だけになるまで最後の樽から流れ出す。

そうさ、「ピーゼルン」の最後の奴の所で、俺達は最後の瓶を飲み、
財布の底まではたくんだ。

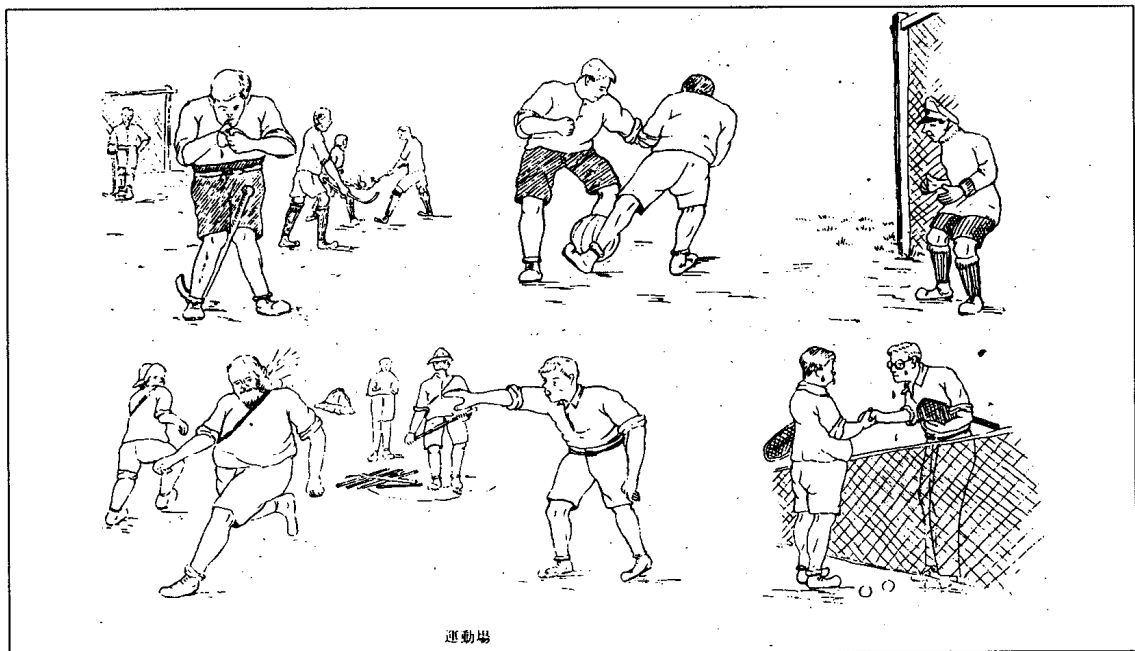




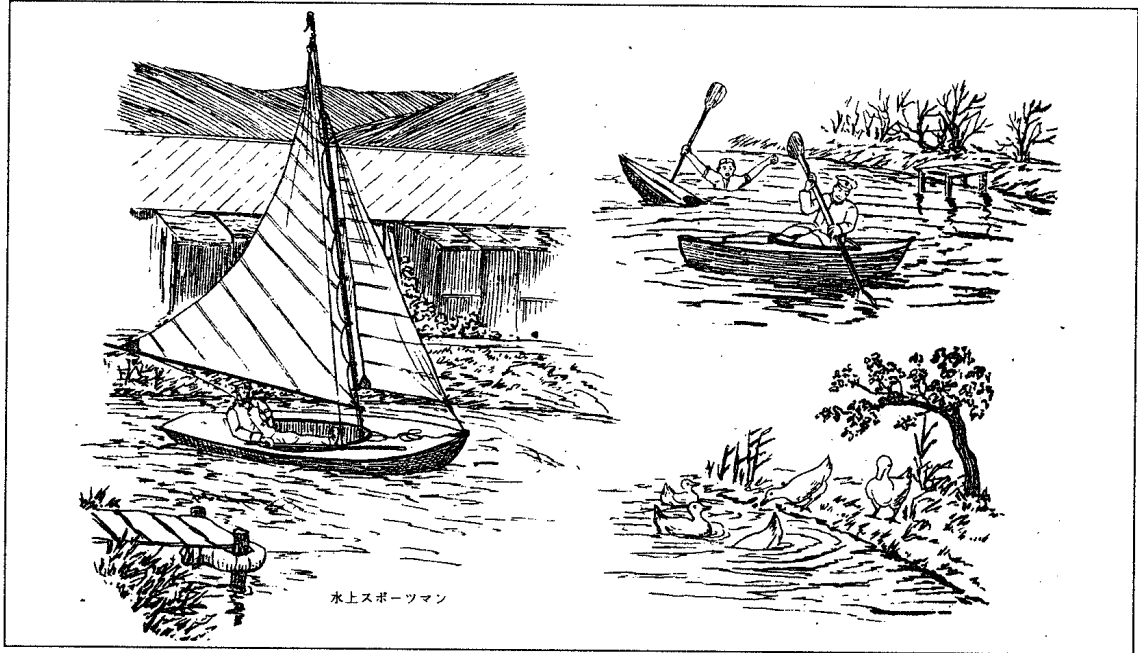
§ 14

そうさ、もうじき広場で最後のボールが、ネットを越えて戻される。
そして最後にいのちがけで、サッカーの試合を楽しくやる。
この日、楽しく、最後にゴールを入れる。最後のホッケーのスティックで。
ボクシングで、最後にボディブローをくらわせる。
最後におっかなびっくり、俺達は鉄棒にぶら下がる。
そしてぐっとたわんだ平行棒が、ドイツの体操家の下できしむだろう。
そうさ、もうじき最後に、俺達は水車の谷にでかけて行く。
最後の木を切り倒すために。
そして最後の最後の車が、俺達の所へやって来る。ハンネスの門を通過。
そいつで仕事がうまく行く。
そして最後に、俺達は浜辺へ散歩に連れて行かれる。
すばらしくきれいな内海に、俺達は嬉しくさよならを言う。

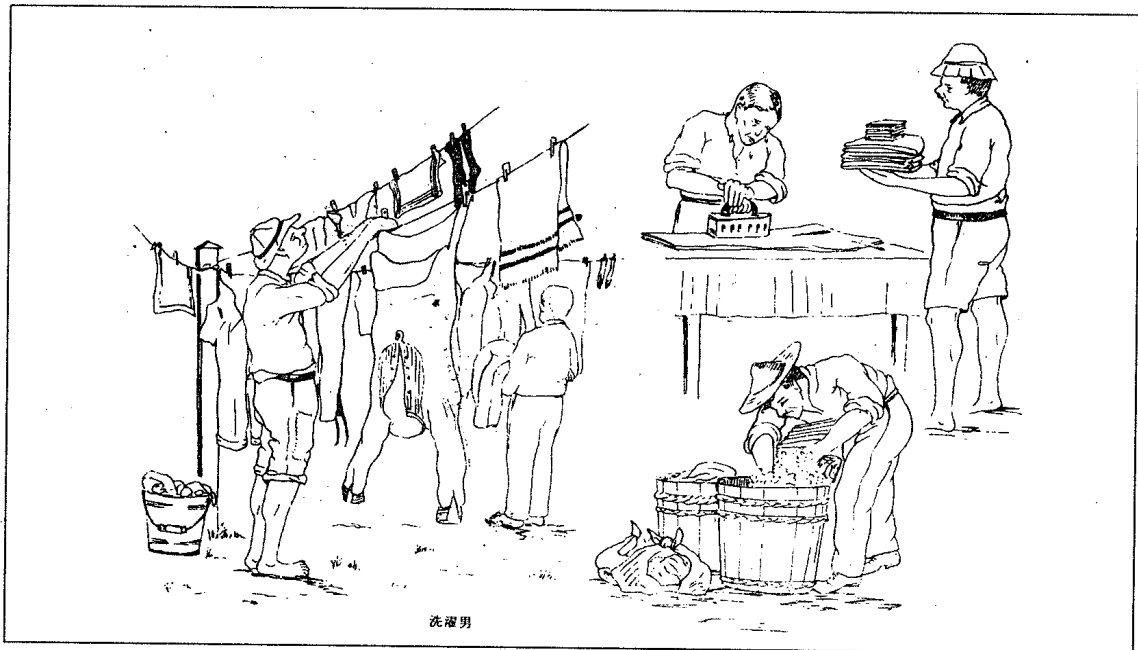




運動場



水上スポーツマン



洗濯男

§ 15

そうさ、もうじき最後に、俺達は鶏小屋に行く。キビ粥を持って。

最後の卵を取りに行き、鶏の最後の鳴き声を聞く。

雄鶏、勇敢な、したたかな奴、そいつは雄の役目を見事に果した。

この最後の雄鶏に、俺達は涙に曇った目を向ける。

そいつの男らしい首筋のあたりに。

そうさ、最後の最後のスタートに、玉突き台のそばででくわして、

最後にキューにチョークを塗り、最後にひねりをくれて、

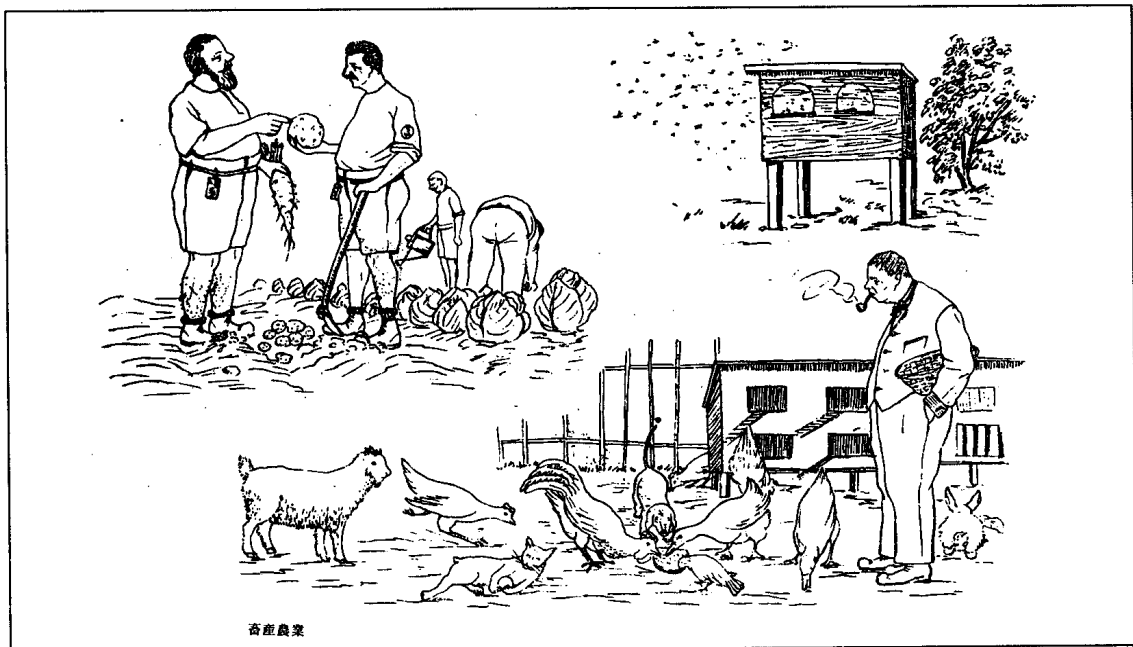
そこで最後の一勝負をする。

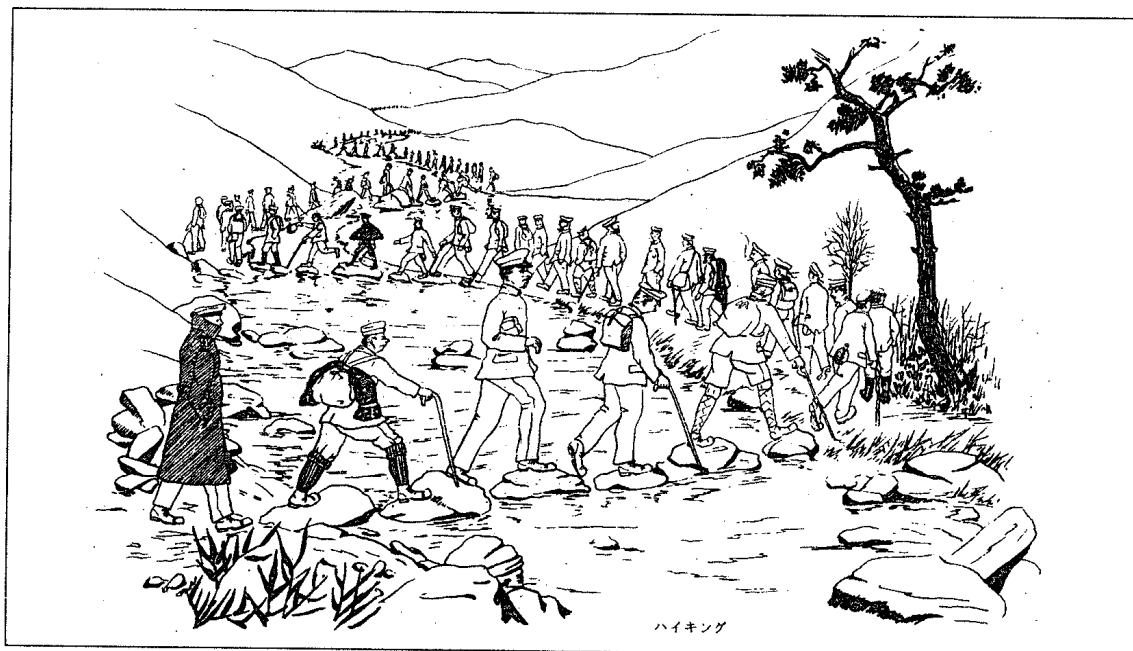
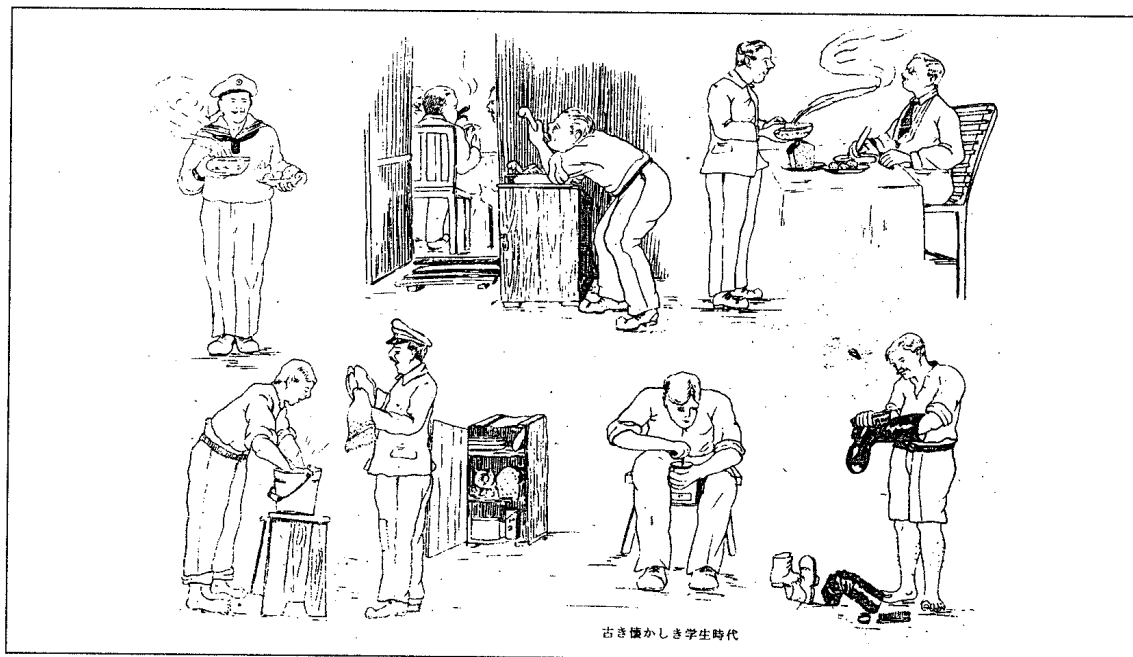
そしてコマツのそばの門の前で、最後の「英雄のジャム」を煮る。

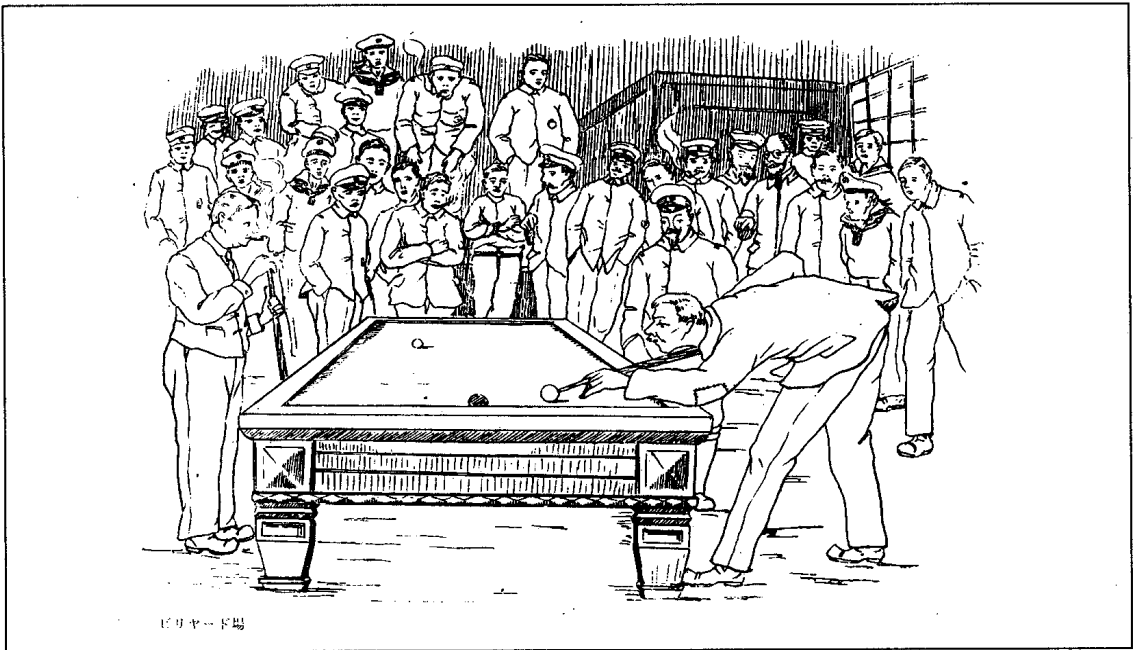
テジェが、俺達のために。

衛生室では、最後の歯が抜かれ、

最後のアスピリンを、君にくれるのさ、相棒。







第一場

§ 16

最後に熱にうかされて、君はあそこに横たわるだろう。

それから最後にそこで、刃と貫で、一番最後の男が目方を計られる。

そうさ、もうじき最後に、クラウスニツァーが、

自分の家畜小屋で最後の牝牛の乳をしぼるだろう。

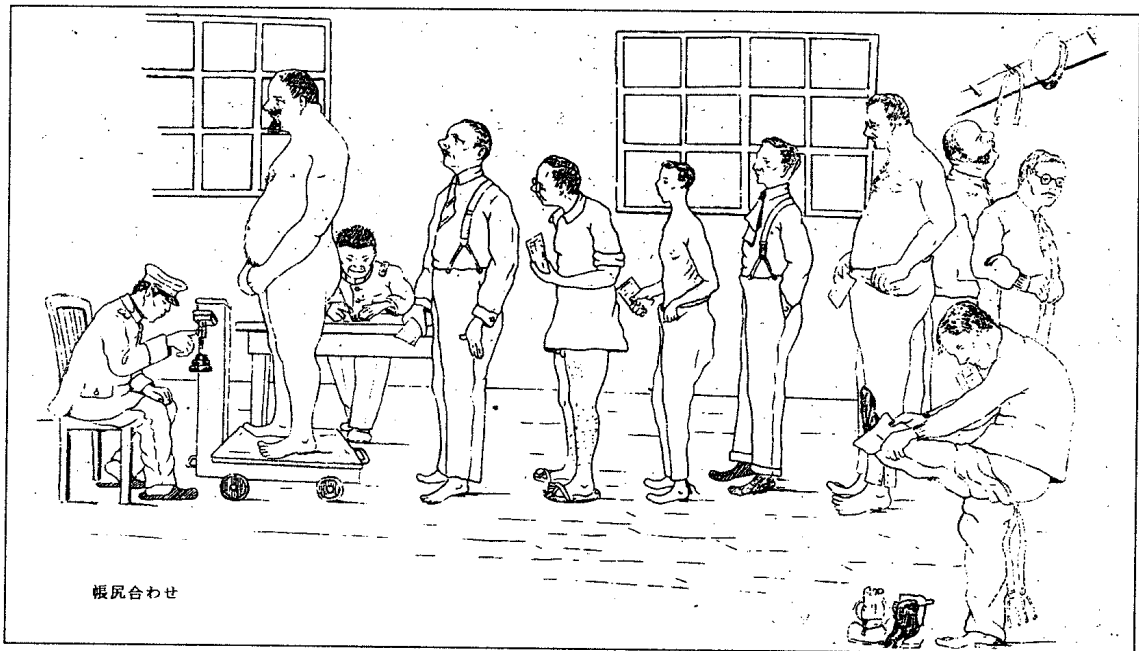
そして最後に君は、鉄場網の前で穫り入れをする。君の最後のサラダ菜を。

最後のインゲンをもぎ、最後のハウレンソウを切り取る。最後の畝を掘る。

そして「大学」に、俺達が行くのも最後だ。

講堂で、熱心な教師の口から、嬉しく最後の「時間」に、最後の精神の糧を
いただく訳だ。

最後のヴェアーナー守備隊が、最後の演奏をする。





ウィンタースポーツ

§ 17

すべての歓びと陽気さと悩みと、すべての純粹さと真実と美しさが、俺達には音の力で、最後にあらわされる。

「ちびのパウル」が鉄条網の後ろで、最後に奏でる時に。

そして勇敢な二等兵曹、ハンゼンの管弦楽が、最後の曲を演奏だ。

それは『歓びよ、美しき神々の火花よ』

そうとも、そのとき俺達は歓喜に酔うんだ！

俺達が板東を後にする前に、シュルツ楽団がまた吹き鳴らすだろう。

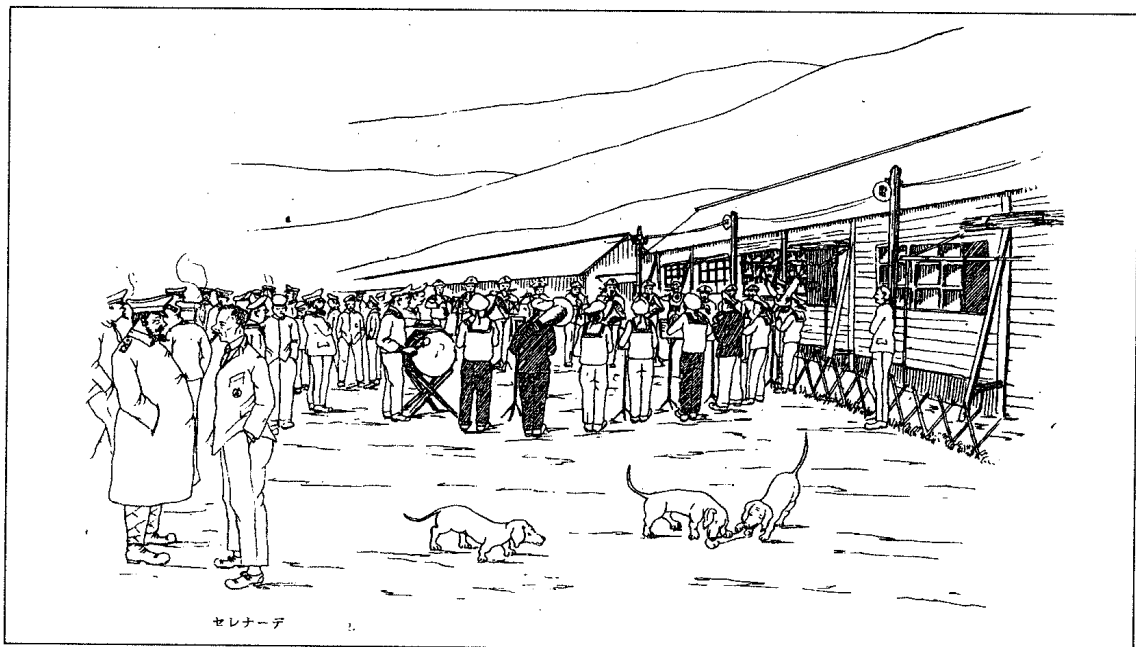
そしてこの最後の日に、最後の太鼓が、このあたりに響き渡るだろう。

モルトレヒトとヤンゼンの一団が歌うだろう。

それからあたりは明るく澄み渡り、間もなく力強く大胆な言葉が、

高い舞台から最後に響き渡るんだ。

そして幕が下りる。バラック I, 「講堂」に。



§ 18

最後に君は「ハウラ！」と、よろこびの叫びで、故郷に呼びかける。

そしてもう一度、嬉しい目をして、縁起のいい、

名高い『屠殺屋のヴェーバー』役を引きあてる。

最後の最後の雄豚と、最後の最後の雌豚が、鉄条網の後ろで死ぬ。

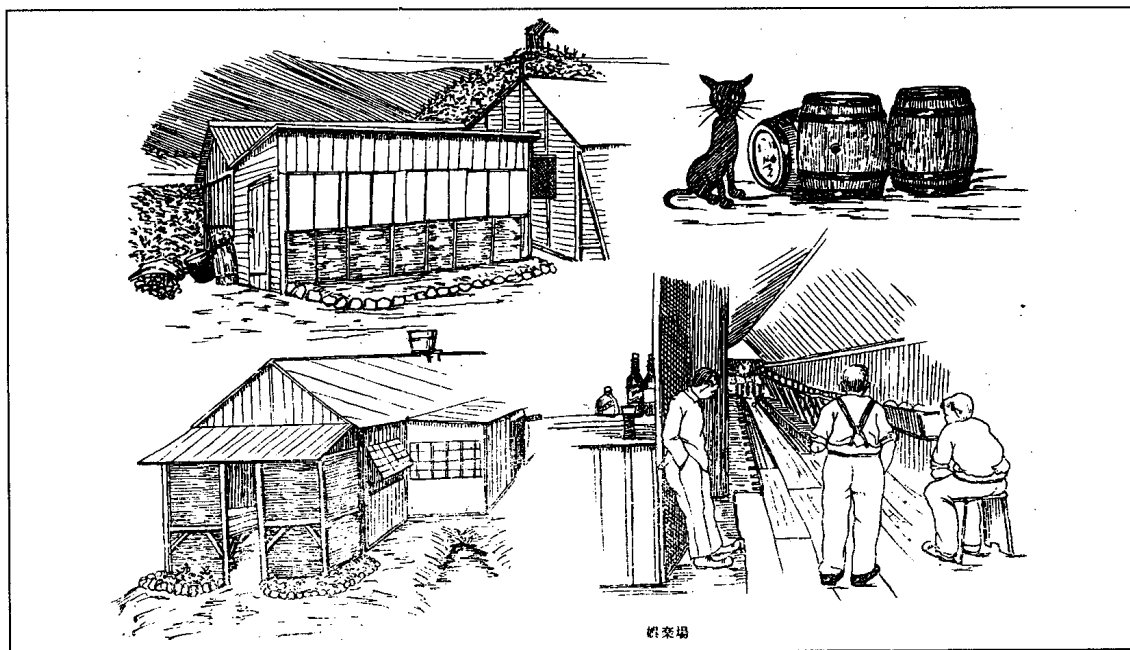
そうさ、もうじきやっとな、労働とスキャンダルと、

ものすごい騒々しさが止む。タバタウ地区で。

そのとき九柱戯場では、最後の男が球を投げ、最後の九番ピンが倒れる。

最後の休憩に、最後の歌が響き、最後の歌手が歌う。

最後の棚板が作られ、最後のヴァイオリンが啜り泣く。鉄条網の後ろで。



§ 19

コック殿の小さな町で—こいつはそこの市長だったが—
最後の夜を繕って、
最後の穴を埋めて、最後の糊で最後の帳面を綴じるんだ。
それから客という客の最後の奴が、シャボン塗られて髭剃られ、
最後の本のお勉強。
も一度、写真、最後の焼き付け。
最後の犬が吠えて、最後の肉団子と、皮付きイモとハウレンソウ。
これもみんな鉄条網の後ろ。
エンドウ豆もインゲンもレンズ豆も、もうじき俺達を煩わさなくなる。
そして—もう隠しておけないが—じきにイモの皮剥きに最後の男の登場だ。
それからハインリッヒ・ヘアマンが、ここに最後の管を置く。
そして最後に、宮殿と市立公演の掃き出した。



§ 20

狭い「船乗りの家」で、最後の男が7人の「でぶ」に、
もうじき幸せにしてもらえる。

そうさ、すべてに、いつかは「最後のとき」が来る。ありがたいことだ！
最後の日のことを思うと、ドキッとすするよ。

俺達は苦痛、悩み、悲しみ、欠乏、憎しみのすべてを、
やっと後にするんだから。

二度目にこの世に、生まれるんだから。

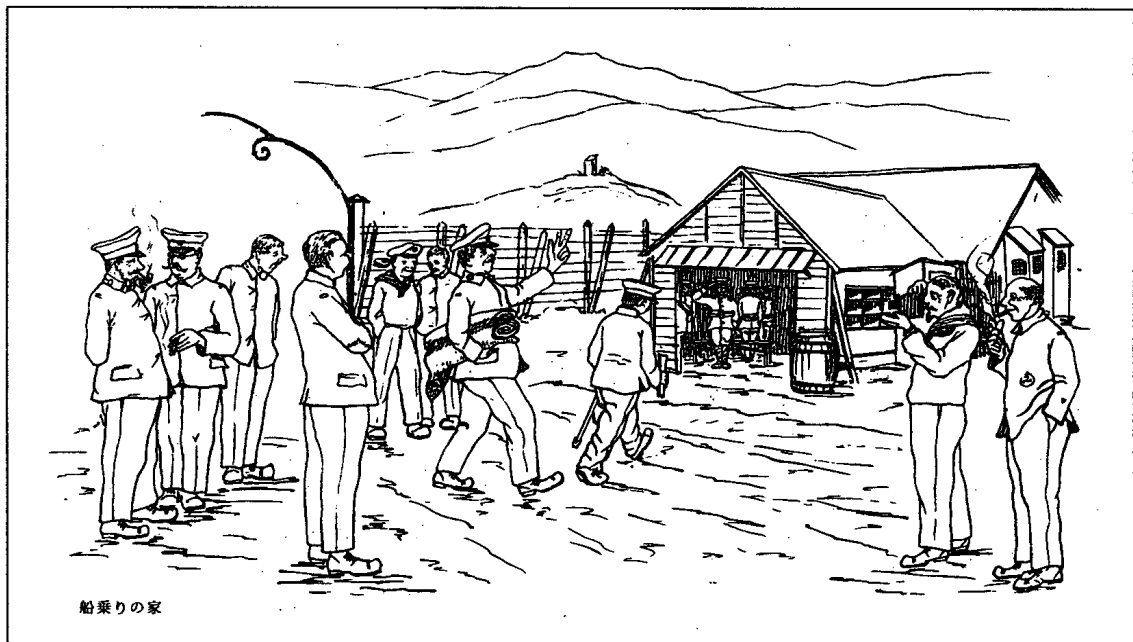
俺達はもう一度人間になるんだから。

そう言ってもいいだろう、最後の日に。

今日、今日、行進だ！それじゃあ、あばよ、バラックの町！

それじゃあ、あばよ、鉄条網！前進！もう二度とは会うまいよ！

故郷の三角旗よ、翻れ！



§ 21

親愛なる兵士よ、ここで俺達がビオラ、チェロ、フルート、ヴァイオリンで、俺達の存在の美しさと光とだけを現しているとは思わないでくれ。言葉と絵によって俺達が君に献呈するのは、シャンパンではないよ。甘いワインでもない。そう、強いビールだ。鉄条網で囲まれた狭い所での生活が、実際どんなものだったか、一リアルに、無遠慮に、さらけ出して一きれいごとのヴェールなんぞかぶせずに、何もかも、君のふうふういっている鼻先に突き付けてやろうじゃないか。君にとっては苦くて渋い飲みごたえだろう。それでも飲めよ、怖じけづかずに飲むんだ。これから君は、全然うまくないものを幾つも飲み込まされるぜ、戦友。でも君の板東型胃袋は鍛えられているから、薬味の効いた堅い物でも耐えられるだろう。4年以上もの鉄条網暮らしの後なら。

